

東京都足立都税事務所長賞

「税金とわたしの教科書」

足立区立 第十中学校

三年 堀内 ゆのん

「この教科書、すごく見やすい！」

初めて拡大教科書を手に取ったとき、私は思わずそう口にしました。小学生だった私は、生まれつき視力が弱く、普通の教科書の文字を読むのに苦労していました。目を細めたり、顔を近づけたりして読むしかなく、授業も大変だと感じていました。

そんなある日、定期的に通っていた眼科の先生が「拡大教科書というものがあるのだけど、使ってみたらどうかな」と提案してくださいました。私は初めてその存在を知り、学校にも相談してもらいました。後日届いた教科書は分厚くて重かったけれど、文字が大きく、行間も広く、とても読みやすいものでした。

拡大教科書を使うようになってから、授業への向き合い方が大きく変わりました。文字が見えることで、こんなにも安心でき、内容を理解しやすくなるのかと感動しました。ただその当時は、「ありがたいな」と思うだけで、それがどう作られているかまでは考えていませんでした。

中学生になり、社会科の授業で税金について学ぶ中で、拡大教科書も税金で作られていると知り、驚きました。特別なサイズや印刷が必要なため、普通の教科書より費用がかかるそうです。その費用を国や自治体が税金で負担してくれていると聞いたとき、自分が社会に支えられていたことを強く感じました。

税金というと、道路や警察、消防などのために使われるものという印象がありました。が、実は教育の現場にも大きく関わっていて、私のように学ぶ環境に支援が必要な子どもたちのためにも使われています。図書館の本や音楽室の楽器、教室の空調など、身近な設備の多くが税金で整えられていると知り、改めてその大切さを実感しました。

私は将来、学校の先生になりたいと思っています。拡大教科書という形で学びを支えられたように、今度は私が、学ぶことに悩んでいる子どもたちの力になりたいからです。そして、税金の仕組みや、社会の中で誰かのために使われるお金の大切さを伝えられるような教師になりたいと考えています。

税金は、目に見えないところで、私たちの暮らしや学びを支えてくれている大切な仕組みです。私が安心して授業を受け、勉強に向き合えたのは、多くの人たちが納めた税金によって、拡大教科書という環境が整えられていたからです。見えにくさで悩んでいた私が、学ぶことの楽しさを知ることができたのは、そうした支えのおかげでした。

そのことをしっかり胸に刻み、支えてもらった経験を生かして、社会の中で誰かを支えられる存在になりたいと思います。たとえ目立たなくても、人の役に立てることを大切にしながら、将来は子どもたちに安心と希望を届けられる先生を目指して努力していきたいです。